

吉川史料館たより

第64号
2017年
(平成29年)
9月22日
金曜日

展示品品の紹介

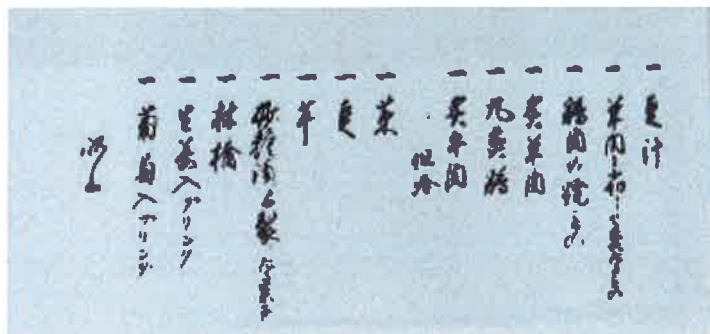
このたびは、吉川経幹夫人の和歌を紹介します。



冬のすえの廿日 三田尻へ旅たせ給ふに
旅のやどり十日余りて 睦月のはじめ
かへらせ給ひければ

新玉の としを重ねて 旅ごろも
はるとともにぞ 立帰るきみ

慶応二年末、三田尻(山口県防府市)において、イギリスのキング提督を毛利敬親・定広父子が歓待することになりました。そして、敬親より経幹に同席の依頼があり三田尻へ赴いたのとうことです。まず、長州藩側は貞永邸にて歓待を行い、翌日はイギリス艦内で敬親たちが招かれました。



英人応接記録より

発行所 吉川史料館

山口県岩国市横山二丁目七―三
郵便番号 七四一―〇〇八一
電話番号 (〇八二七)―四一―一〇一〇

敬親をはじめ経幹らが初めての西洋料理を食べたと思われます。

艦内では、記念撮影も行われたのですが、どうもこれは秘密でした。写真の存在は、明治二年、経幹の家臣がイギリス人より聞いてはじめてわかった事実です。その写真が次のとおりです。



長州藩は文久二年より尊王攘夷を掲げて運動してきましたが、外国人を歓待し、また写真を撮影するなど矛盾した行為なので秘密にしていたのです。翌年一月三日、経幹は岩国に帰り、一安心した経幹夫人が和歌を詠んだのです。

さて、経幹はこの三ヶ月後に三十八才で逝去し、表向きには隠居とし、嫡男・経健が当主となりました。死を公表した明治二年に詠んだと思われる和歌が次の二首です。

きみ(経幹)の三回忌にあたらせ給ふに

玉の緒はたえての後の 雲井まで
あぐるは君がいさを也鳥

ありし世の心づくしも苔の下に
いまこそ君は嬉しかるらめ

この頃は、岩国は念願であった城主格をみとめられ、経健は岩国藩知事に任命され、十五才という若さでしたが岩国の文化教育に貢献しました。



吉川経健写真 明治2年

(原田史子)

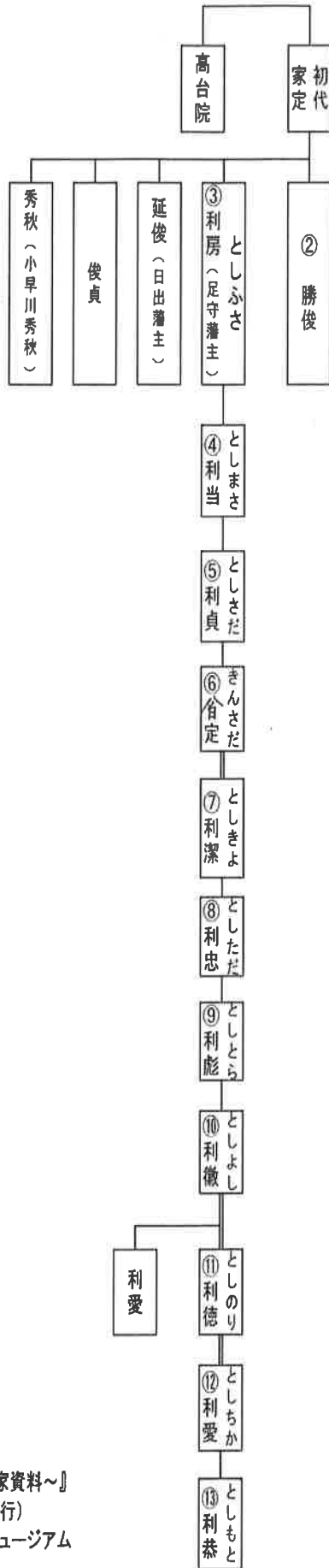
足守藩について

経幹夫人は足守藩木下利愛の次女として生まれました。

足守藩は、現在の岡山市北区にあります。この聞きなれない藩は、木下家定を祖とします。家定は、高台院すなわち豊臣秀吉の正妻・お禰の兄にあたります。もともと杉原姓でしたが、木下家定と名乗るようになり、秀吉に重用され姫路城主となりました。

慶長六年(一六〇一)、足守藩主(二万五千石)となりました。家定の子供は、関ヶ原合戦において人生が大きくかわりました。

足守藩木下家系図(略)



※ 参考資料
『岡山に生きた豊臣家
～備中足守藩 木下家資料～』
(平成27年1月9日発行)
編集・発行岡山シティミュージアム

まず、長男勝俊という、秀吉に仕えて小浜城主(現在の福井県)となっていました。関ヶ原合戦で東西どちらにもつかないために徳川家康の怒りを買い、牢人となりました。その後、京都にて「長嘯子(ちようちようし)」と号し歌人として生活を送りました。足守の地は家定が慶長十三年に亡くなると没収されましたが、次男利房に与えられ、江戸時代を通じて利房の子孫が足守の地を治めることとなりました。

戦では西軍でしたが、途中から東軍側にとり、これが家康を勝利の要因といわれています。岡山城主(五十一万石)となりました。しかし、合戦の二年後に二十一才の若さで亡くなりました。秀秋の事は、史料が少なく残念なところです。このように天下分け目の関ヶ原合戦というのは、一つの家が二つに分かれ、そして、その後の人生の命運が分かれたのです。戦国時代とは、生きることがいかに困難であったかを物語ります。明治になり、13代当主の利恭は、弟・利永の次男・利玄(としはる)を養子とし家督を継がせました。利玄は上京し学習院を経て東京大学文科へ進学しました。



小早川秀秋花押
(館蔵 判鑑より)

明治四十三年(一九一〇)、かつての学習院時代の同級生の志賀直哉らと共に「白樺」を刊行し歌人として活躍しました。

歴史エッセイ

刀の行方 原田史子

吉川経幹は、毛利敬親より絵画、棗、書、刀剣を贈られています。現在、当館には棗と書を収蔵しています。由緒のある品ですので、書は、表装は最上級の織物で仕上げ納め箱は二重となつていきます。いかに大切にしてきたかが分かります。

さて、本家毛利家より贈られた品で行方不明のものはあつても、それは時代の流れかもしれない。刀や絵画は、それにあたると思われず。ただ、刀については、毛利元就の差料でした。

贈られた時期は、元治元年八月廿日、当時は長州征討令が発令されており、長州藩は存亡の危機を迎えていました。

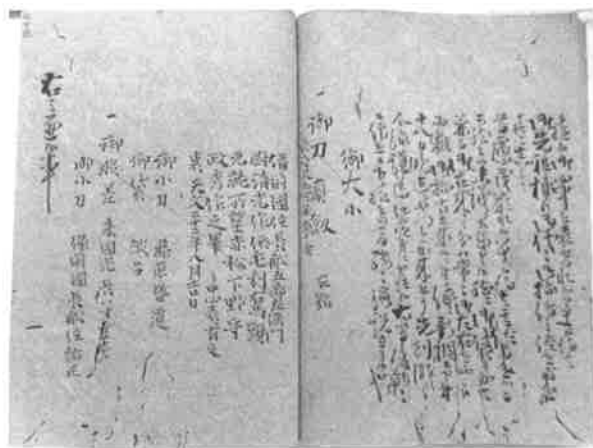
この原因は、この年の七月十九日、上京した長州軍が御所の蛤御門付近にて会津・薩摩・桑名藩と武力衝突となり、長州軍が御門に発砲したことが朝敵とみなされたためです。

経幹は、上京した長州軍の家老以下首謀者の処分をして申し開きをすることを敬親に伝えます。八月六日には敬親の使者・清水清太郎と麻田公輔が岩国に来て、上国向きの周旋を経幹に依頼します。其後、経幹は安芸藩を介して幕府と交渉できるよう自ら広島に赴

くこととなりました。そして、八月二十一日に草津(現在の広島市西区)において浅野式部(安芸藩主の弟)と会谈するので。

その前日、毛利敬親の使者・上山縫が刀を持参し岩国に来ました。敬親は経幹が安芸藩を介して幕府側との交渉に奔走していることに感謝の気持ちを伝えました。そして、先祖の洞春公、すなわち毛利元就の差料の刀を大小二口を譲るということでした。

さて、毛利元就の刀ならば、それは大事にするはずなのですが、現存していません。その刀とはどんなものか「吉川経幹周旋記第四」に詳しく記されています。



「御大小

一 御刀真剣

長 一尺九寸二步余

備前国住長船五郎左衛門尉清光作

依毛利右馬頭元就所望赤松下野守

政秀作之畢卜中心表二有之裏

天文二十二年八月吉日

御小刀 藤原盛道

御袋 緞子

一 御脇差 来国光 長八寸一步

御小刀 備前国長船住祐正

一 御刀真剣は、銘に天文二十二年に毛利元就が赤松政秀に依頼したというものです。

ところで、この刀と似た刀が実は毛利博物館に収蔵されています。

『毛利博物館名品選 武器』のなかに刀『長船清光』とあり、銘が「備前国住長船五郎左衛門尉清光作 依毛利右馬頭元就所望赤松下野守秀作之畢」裏に「天文廿三年八月吉日」と製作年月が一年違いですが、銘が全く同じなのです。長さも同じぐらいなので、もしかしたら吉川家から毛利家に返却したのかなと推測しましたが、そのようなことはないそうです。

ともあれ、敬親は元就の差料を経幹へ譲るほど信頼していた人物であったのです。

吉川家へ贈られた清光の刀の行方はこれからの課題で、長くなりそうです。

編集後記

経幹が最初に取り組んだのは、藩士の子弟の学校の創立です。

これは、萩の明倫館を参考にし、優秀な人材を育成しようと考えからでした。そして、藩校・養老館は弘化四年(一八四七)に開校しました。

二年後の嘉永二年、熊本藩士・横井小楠が岩国を訪れ、養老館で勉学に励む少年らを褒めたそうです。

小楠は福井藩に招かれ藩政改革に取り組んだ人物です。また、大の酒好きとしても有名でした。

『横井小楠遺稿』に岩国の記述の中に「儉約誠に甚敷、当主以下総て綿服家内も同様にて御座候、宴会上下一切禁止、私共十分之珍客にもてなされ候に一度も酒肴の振舞に逢不申、藩士何も甚以気の毒がり、度毎に重畳相断申候」と岩国の藩士たちはお酒を提供できずに恐縮していたというのです。

このような儉約情勢の中、まずは優秀な人材育成に取り組むことを第一としたのが経幹だったのです。(原田)

吉川 史料館

〒七四一-〇〇八一

山口県岩国市横山二丁目七-三

TEL 〇八二七-四一-一〇二〇

FAX 〇八二七-四一-三二〇〇

吉川経幹展

期間—平成29年9月22日(金)～12月24日(日)吉川史料館

番号	史料名	時代		員数
◎1	国宝・狐ヶ崎太刀 展示期間 平成29年9月22日～11月26日	鎌倉時代初期	青江為次作	1口
○2	吾妻鏡	大永2年	右田弘詮筆写	3冊
○3	太平記	永禄6年～8年	吉川元春筆写	5冊
4	養老館碑拓本			1幅
5	青磁香炉	明時代		1個
6	紅溜塗棗	江戸時代	毛利敬親より拝領	1個
7	遊江風山月書楼記額	安政3年(1856)	吉川経幹筆	1面
8	四大字「雨奇晴好」	江戸時代末期	吉川経幹筆	1面
9	語句	安政5年(1858)	毛利敬親筆	1幅
10	長井雅楽演説手控	文久元年(1861)		1通
11	吉川経幹周旋記(第1)	明治14年(1881)		1冊
12	朝廷達書	文久2年(1862)		1通
13	吉川経幹周旋記(第)	明治14年(1881)		1冊
14	七卿都落図			1枚
15	毛利元純書状	元治元年(1864)7月		1通
16	語句	明治時代	三条実美筆	2幅
17	五大字	明治14年	三条実美筆	1面
18	源氏絵	江戸時代	沢宣嘉筆	2幅
19	短刀	南北朝時代	長州安吉作	1口
20	太刀	南北朝時代	相州秋広作	1口
21	吉川経幹画像	明治30年(1897)	エドアルド・キヨッソーネ筆	1額
22	筋兜	江戸時代	吉川経幹所用	1鉢
23	紫糸威具足	江戸時代	吉川経幹所用	1領
24	征長令	元治元年		1通
25	西郷隆盛書状	元治元年11月	香川諒、山田右門宛	1通
26	吉川経幹覚書	元治元年		1通
27	毛利敬親 定広連署書状	慶応元年(1865)		1通
28	毛利敬親届書	慶応元年		1通
29	軍令状	慶応2年(1866)		1通
30	吉川経幹周旋記(第20)	明治14年		1冊
31	勝海舟書状	慶応2年	安達十郎右衛門宛	1通
32	四侯連名伺書写			1通
33	城主格達書	明治元年(1868)		1通
34	七言絶句	文久3年	吉川経幹筆	2幅
35	七言律詩	江戸時代	吉川経幹筆	1幅
36	四大字「処静修閑」	文久3年	吉川経幹筆	1額
37	語句	江戸時代	西郷隆盛筆	1幅
38	印章	江戸時代	吉川経幹所用	10個
39	蒔絵硯箱短冊箱	江戸時代	経幹夫人所用	1個
40	和歌	江戸時代～明治時代	経幹夫人所用	3首
41	化粧道具	江戸時代～明治時代	経幹夫人所用	
42	キセル	江戸時代～明治時代	経幹夫人所用	5本
43	煙草入れ	江戸時代～明治時代	経幹夫人所用	3個

◎ 国宝指定

○は国指定重要文化財